

ジャイナ教における Devī 信仰

——白衣派尊像崇拜派の Padmāvati Devī 儀礼を中心として——

清 水 晶 子

はじめに

ジャイナ教の白衣派尊像崇拜派 (Śvetāmbara Mūrtipūjaka) は、寺院において在家の信徒が集団あるいは個人によって毎朝救済者 (Tirthaṅkara, 祖師) の像 (mūrti) に対して祭祀・儀礼 (pūjā) を行うことを特徴とする。ただしジャイナ教では教義上、救済者は解脱した修行の完成者であり人々の祈りに直接応えることはできないために、現世利益の祈願・成就を目的とする祈りに応えるのは神々に役目が与えられている。

白衣派尊像崇拜派の信徒は、クラ・デーヴァ／デーヴィー (kula deva / kula devī ——属する氏族 [jāti, gotra] の神・女神)、ナーコーラー・バイラヴァ (Nākoṛā Bhairava)、ガンターカラナ・マハーヴィーラ (Ghaṇṭākaraṇa Mahāvīra)、ブーミヤー・ジー (Bhūmiyā Jī) と呼ばれる諸神のほか、さらにヒンドゥーの神々も含めて個人の選択によってさまざまな神々を崇拜しているが、寺院を中心とするコミュニティとして集団で祭祀を行う場合は、属する宗派 (白衣派・空衣派 [Digambara])、支持する修行者の集団 (gaccha, samudāya) あるいは地域による人気の神々との関連において選択される。神々に対する pūjā には、寺院で実行される解脱を象徴する救済者に対するものとは異なった信仰の形態が認められる。

これまでほとんど知られていなかったジャイナ教徒の神々への信仰について、小稿ではデリーにある白衣派尊像崇拜派の信徒組織、シュリー・アートマーナンダ・ジェイン・サバー (Śrī Ātmānanda Jain Sabhā) のループナガル寺院のコミュニティが中心となって実践する devī pūjā を特に考察の対象として取り上げ、これまでに実施してきたフィールドワーク (1998–9, 2004, 2011) から得られた資料に基づいて検討したいと思う。

ジャイナ教と Devī

ジャイナ教の古い聖典には神々への信仰に関する記述は多くは見られないが、土着の神々に起源を持つヤクシャ (yakṣa/yakṣī あるいは yakṣiṇī)¹⁾ が崇拝の対象として取り入れられたのは比較的早い時期と思われる。ヤクシャが造形的に表現されて神としての地位を与えられ、救済者の教えを司るシャーサナデーヴァター (śāsanadevatā) としての役割を担って 24 人の救済者のそれぞれに男女ペアの眷属として発展してくるのは 8 世紀前半になってからとされる。10 世紀になると、ヤクシー崇拝が盛んとなり特定の救済者と関連して儀礼の対象となっていく。その中でもとりわけ第 1 祖リシャバナータ (Ṛṣabhanātha) の眷属チャクレシュワリー・デーヴィー (Cakreśvarī Devī) と、第 22 祖ネーミナータ (Neminātha) の眷属アンビカー・デーヴィー (Ambikā Devī, 別名クシャマーンディニー・デーヴィー [Kūṣa-māṇḍinī Devī]) は、偉大な力を持つという理由から信仰を集めているが、また白衣派・空衣派の信徒に共通して最も人気があるのは、第 23 祖パールシュヴァナータ (Pārśvanātha) の眷属の女神パドマーヴァティー (Padmāvatī) である。一方で, deva は人々からほとんど認知されず devī の方が圧倒的に支持されていることは興味深い。

南インドでは中世において devī 信仰が重要な宗教的役割を果たした。Padmāvatī Devī はカルナータカで最も人気のあるジャイナ教の devī であり、有力な氏族の kula devī に由来を持ち、コブラ (nāga) の王ダラネンドラ (Dharaṇendra) の配偶者とされるが、Pārśvanātha の眷属としての地位が確立するのは比較的遅く 10 世紀頃と言われている。また Padmāvatī Devī は願いをかなえ災難を除く神として、中世以降特にカルナータカの空衣派において、タントラ儀礼として真言 (mantra), ヤントラ (yantra), 印契 (mudrā), ニヤーサ (nyāsa) の形式をもって発展した。Padmāvatī Devī に関する中世のジャイナ教のタントラの儀礼と現在行われている儀礼との関連はほとんど解明されていないが、以下に見る Padmāvatī Devī Pūjā で実践される真言 (mantra) や讃嘆詩 (stotra) の吟誦は中世のタントラ儀礼に由来していると考えられる。

コミュニティと Padmāvatī Devī

ループナガル寺院のコミュニティが Padmāvatī Devī を熱心に信仰するようになったのは、修行者の集団との密接な関係が背景にあらう。このコミュニティ

の年中行事としては、ポーシャ・ダシュミー (Pauṣa Daśamī [Pauṣa 月黒分 10 日]), ヴァルシャ・ガーンタ (Varṣa Gāṇṭha, śukla ekādaśī) [Vaiśākha 月白分 1 日]), 毎月陰暦の黒分 10 日 (vadi/kṛṣṇa daśmī) などの集団儀礼が定期的に執り行われている。寺院の中には Tapā Gaccha の守護神マニバドラ・ヴィーラ (Maṇibhadra Vīra) と共に Padmāvatī Devī の像を祀る別室があり、信徒は救済者に対する pūjā を行った後に必ず礼拝をする。郊外にはシュリー・ヴィジャヤ・ヴァッラバ・スーリ・スマーラク (Śrī Vijaya Vallabha Sūri Smārak) と呼ばれる信徒のための宗教複合施設の中に Padmāvatī Devī を祀る独立した寺院が、第 12 祖救済者ヴァースプージャ (Vāsupūjya) を安置する寺院、ムリガーヴァティー・シュリーニ (Sādhvī Mṛgāvatī Śrī Jī, 1926–86) とその弟子のジュエーシュタ・シュリーニ (Sādhvī Jyeṣṭha Śrī Jī) の霊廟 (samādhi mandira), 僧尼・巡礼者用の宿泊施設 (upāśraya, dharmaśālā), ジャイナ教の学校 (vidyā-piṭha) などと共に建立されている。

スマーラクの Padmāvatī Devī 寺院は、インドの分離独立後の 1950 年代、パキスタン・パンジャブからデリーに避難してきた Śrī Ātmānanda Jain Sabhā に所属するループナガル寺院の信徒が中心となって、計画から 10 年の歳月を経て 1984 年に完成した。スマーラクの宗教複合施設はループナガルのメンバーが独立以前から信奉するアーチャリヤ・ヴィジャヤ・ヴァッラバ・スーリ (Ācārya Vijaya Vallabha Sūri, 1870–1954) を記念して、その弟子 Mṛgāvatī Śrī Jī の尽力により師の理想である信徒ばかりでなくインドの人々に近代教育の場を提供するために建設された。Mṛgāvatī Śrī Jī は自身が信仰する Padmāvatī Devī をスマーラクの守護神として選択し、莫大な建設費を捻出するために devī の寺院を最初に建立して、デリーにおけるヴァッラバ・サムダーヤ (Vallabha Samudāya)²⁾ の拠点とした。Padmāvatī Devī の人気によってスマーラクは全インドのみならず海外の裕福な白衣派尊像崇拝派の信徒からも寄進を受け、現在も拡張を続けている。また、ループナガル寺院とスマーラクは Vallabha Samudāya にとり北インドにおける重要な拠点の一つとなっている。

スマーラクにある大理石の Padmāvatī Devī の坐像は、内堂に安置されており、頭上には Pārśvanātha を戴いて 7 つのコブラのフードに覆われ、右手にハス (kamala), コブラ (nāga), 左手に果物 (phala), 棒 (ankuśa) を持つ 4 本の腕の形で表現され、配偶者のダラネンドラの小像は右脇に配置されている。人々はスポンサーとなって pūjā を主催し、Padmāvatī Devī に息子の誕生、家族の健康、ビジネスでの成功などを祈願する。祈願あるいは願いが成就した際には再び pūjā を行って、

(260)

ジャイナ教における Devī 信仰 (清 水)

pūjā で使用される devī の装飾品を購入したり参加者全員で摂る菜食主義に適った特別な食事を提供したりなどする。

Padmāvatī Devī Pūjā

ジャイナ教の devī pūjā にはヒンドゥー教の神々への pūjā との類似が見られる。ヒンドゥー教における寺院での神々への pūjā は、重要な 4 つのパート——沐浴 (snāna), 装飾 (ālankāra), 供物 (naivedya), 献灯 (ārati) を捧げる行為 (upacāra) によって構成されている³⁾。pūjā を執行するのは僧侶の役目であり、ヴェーダ・サンスクリットの聖典が使用される。人々は pūjā によって神々への尊崇を表わし願い事をする。これに対してジャイナ教の場合は、devī 像の沐浴は行われず、また奉納される装飾品は豪華で種類も多い。そして、装飾、供物、献灯の儀礼はすべて信徒自身の手で実行される。これらがヒンドゥー教の pūjā との顕著な相違点である。Padmāvatī Devī Pūjā は集団で寺院において救済者に対して行われるテキストに則った pūjā と同様に、供物を捧げて行われる dravya pūjā と吟誦・瞑想による bhāva pūjā に分けられ、順序に従って進行されるが、devī に捧げる供物の儀礼の間に歌われる讃歌 (bhajana) のパートが大半を占め、その讃歌は歌い手達が自由に選択する曲によって即興的に歌われる。

スマーラクの Padmāvatī Devī Pūjā においては、ループナガル寺院のコミュニティの支持する修行者の集団 (Vallabha Samudāya) によって作成されたテキスト Pragṭa Prabhāvī Mātā Padmāvatī のブックレット⁴⁾ が参照される。通常の pūjā は devī を招来するために参加者全員で讃歌を歌うことから始まる。devī の像は devī の頭上に吊るされた 2 個の冠 (mukuta), 10 種の装飾品——ドレス (cola), スカーフ (dupatta), 宝石 (ābhūṣaṇa), 指輪 (aṅgūṭhī), アンクレット (pāyal), 腕輪 (cūra), ノーズリング (nathanī), イヤリング (kanta), ネックレス (hāra), ティアラ (ṭikā) によって飾られて行く。赤い糸 (mauli) で縛ったココナッツと共に菓子、果物、米、花輪、香が供えられる。最後に紙幣が供えられ、白檀のペーストとパウダーが像の足指に塗られる。devī に供物が捧げられている間、途切れることなくソロあるいは全員で Pārśvanātha や Padmāvatī をテーマにした讃歌が歌われる。

後半の pūjā はテキストに記述された独誦・吟誦を中心とした bhāva pūjā で構成されている。Mantrādhirāja Śrī Pārśvanātha stotram と Māteśvarī Padmāvatī ke doha は代表者一人が唱える。次に参加者全員で Padmāvatī ka stavana (Mṛgāvatī Śrī Ji 創作) を歌い、Mantra Prakāśa (Mṛgāvatī Śrī Ji 創作) と Āśīrvacanam (サンスクリットあるい

はヒンディー版)が唱えられる。最後に Devī に対して献灯が捧げられ、全員で Mā-teśvarī Padmāvati ki āratī (Mṛgāvati Śrī Jī 創作)の歌が歌われる。

ヒンドゥー教の場合やジャイナ教の場合でも、Nākoṛā Bhairava や Ghaṇṭākaraṇa Mahāvīra の pūjā の場合は信徒が神々へ捧げた供物はプラサーダ (prasāda) として再び信徒に配分されるが、devī に供えられた供物は信徒には分配されず、プジャーリー (pujārī) と呼ばれる寺院付きの pūjā の補佐をする者に下げ渡される。これは Padmāvati Devī が救済者の眷属という神々の中では高位の立場にあるという理由から、救済者への pūjā の際と同様に信徒は prasāda を受け取らないと考えられる⁵⁾。

Padmāvati Devī Pūjā に特徴的な点は、pūjā と共にヴィディ (vidhi) と呼ばれる節食などの規則を実行することである。vidhi を実践する人々は、儀礼の前夜 (11 時頃) から ekāsana paccakkhāṇa (一日一座所での節食の誓約) を唱え水分と食事を断ち、儀礼後は参加者全員と共に一日に一回、昼の食事 (bhojana) のみを口にし、制限された食品と作法によって食事をする。ekāsana を実践する信徒は、給仕される食事の中から根菜と発酵食品を避け、さらに斎日 (tithi) に重なる場合は緑の野菜や果物も摂らない。受けた食事を残すことや一度食事の座に着いたらその場を動くことは禁じられている。寺院での場合と同様に、すべての参加者は pūjā の前に沐浴を済ませて新しいあるいは洗濯された衣服を着用して参加し、心身共に清浄を保つことが求められている。

おわりに

Padmāvati Devī は Vallabha Samudāya の Sādhvī Mṛgāvati Śrī Jī によってループナガル寺院のコミュニティーに招来され、宗教行事の重要な部分を担って信徒の信仰を集めている。コミュニティーと修行者集団との緊密な関連が devī と集団で行われる pūjā を通じて形成されている。信徒は信奉する修行者集団に経済的支援を行い、一方修行者集団は pūjā のテキストを編纂し、宗教行事を通して信徒集団の宗教生活に深く関わることによって自らの勢力の安定と拡大を図ることができる。ループナガル寺院のコミュニティーの場合、修行者集団との関わりは gaccha の単位ではなく samudāya のグループとの関係によって結ばれている。

Devī 崇拝はジャイナ教の教義上の制約から、信徒の直接の願いに答えられない救済者と信徒を繋ぐという重要な役割を与えられている。現在行われている pūjā は、長い歴史を経て周囲の宗教的影響による変容を受けながらも、ジャイナ

(262)

ジャイナ教における Devī 信仰 (清 水)

教の教義の枠組みの中で状況に応じた信徒と修行者との交流・交渉がはかられ、構成されてきた産物と考えられる。

- 1) ジャイナ教徒の yakṣa/yakṣī あるいは devī 信仰については, Ram Bhushan Prasad Singh, *Jainism in Early Medieval Karnataka* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1975), 51–60; Asim Kumar Chatterjee, *A Comparative History of Jainism* (Calcutta: Firma KLM, 1978.), vol. I, Appendix B, “Early Jainism and Yakṣa Worship,” 349–58; J. Cort, “Medieval Jaina Goddess Traditions,” *Numen* 34, no. 2 (December 1987), 235–55; Padmanabh S. Jaini, “Is There a Popular Jainism?” in *Collected Papers on Jaina Studies* (Delhi: Motilal Banarsidass, 2000), 267–79; Paul Dundas, *The Jains*, 2nd ed. (London: Routledge, 2002), 212–4 参照。
- 2) 白衣派尊像崇拜派の修行者は 27 の独立した samudāya に分かれている。gaccha は Tapā, Añcala, Kharatara, Tristuti, Pārśvacandra, Vimala の 6 つにわかれ、Tapā Gaccha の修行僧が 90% を占める。Tapā Gaccha は 2 つの支部 (Vijaya Śākhā と Sāgara Śākhā) より成る。さらにその下部組織として samudāya (Vijaya Śākhā は 20, Sāgara Śākhā は 2) に分けられ、samudāya はさらに小ユニット (parivāra と saṅghaḍā) に分かれている。Vijaya Vallabha Sūri の samudāya は 295 人の修行者 (僧 60 人, 尼僧 235 人) で構成されている。修行者団体の組織・人数に関しては Peter Flügel, “Demographic Trends in Jain Monasticism,” in *Studies in Jaina History and Culture Doctrines and Dialogues*, ed. P. Flügel, 312–98 (London: Routledge, 2006), 322–3 を参照。
- 3) ヒンドゥー教寺院での pūjā はマドゥライの Minākṣī 寺院 (Chris J. Fuller, *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India* [Princeton: Princeton University Press, 1992], 66–9) とプーナの Catuḥśṛṅgī 寺院 (Musashi Tachikawa, Shoun Hino and Lalita Deohar, *Pūjā and Saṃskāra* [Delhi: Motilal Banarsidass, 2001], 29–59) の例を参照。
- 4) Jagdīs Mitra Jain, ed., *Pragaṭa Prabhāvi Mātā Padmāvatī Devī*, 2nd ed. (Delhi: Devī Padmāvatī Charitable Trust, 1991)。ループナガル・コミュニティで使用する devī pūjā のテキストと同様に、グジャラートのマフディーでの Ghaṇṭākaraṇa Mahāvīra Pūjā は Tapā Gaccha の Ācārya Buddhīsāgara Sūri (1874–1925) の編纂したブックレット Śrī Ghaṇṭākaraṇa Mahāvīra Dev が参照され、mantra, yantra, havana を中心とした pūjā となっている。神々への pūjā のテキストの創作は 19–20 世紀の白衣派尊像崇拜派の修行者集団における復興運動との関連も指摘されている。John E. Cort, *Jains in the World: Religious Values and Ideology in India* (New York: Oxford University Press, 2001), 164–7 参照。
- 5) Nākoṛā Bhairava に関して Lawrence Babb, *Absent Lord* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1996), 95–6; James Laidlaw, *Riches and Renunciation: Religion, Economy, and Society among the Jains* (Oxford: Clarendon Press, 1995), 71–4, Ghaṇṭākaraṇa Mahāvīra については John E. Cort, “Tantra in Jainism: The Cult of Ghaṇṭākaraṇ Mahāvīra, the Great Hero Bell-Ear,” *Bulletin D’Etudes Indiennes* 15 (1997): 115–33 参照。

〈キーワード〉 ジャイナ教, 白衣派尊像崇拜派, 集団儀礼, Padmāvatī Devī Pūjā, samudāya
(公益財団法人中村元東方研究所研究員, PhD)